

大会宣言

私たちはこの第131回定期大会で「仕事の力をいかし、言論・出版・表現の自由を次の世代に手渡そう！自分で考え、自分で決め、自分で選べる自由の大切さを、声に出して、伝えよう！」をスローガンとして掲げ、2019年度の運動方針案について討議してきました。

出版労連は、今年3月に結成60周年を迎えました。人生でいえば還暦です。結成当時の組合に結集した先達たちの活動の原点に立ち返り、労働組合の意味を再確認しながら私たち自身の未来へつなぐ運動を展開していきましょう。60年前の1958年3月15日に開かれた出版労協の結成大会は、その日の夜のテレビニュースでも報道されたとのこと。「出版労協は、日本の全出版労働者の団結と友情、連帯と統一の民主的な中央組織である」と大会宣言をし、33組合3106名でスタートしました。60年安保闘争、高度成長下の春闘、ベトナム戦争、教科書攻撃、頻発した大争議など、激動の流れを乗り越え、1975年に出版労協から出版労連に発展。平和と民主主義、言論・出版・表現の自由を守るたたかいに奮闘し、出版労働者の権利を確立してきました。

そして60年たった現在の私たちの状況はどうでしょうか。残念ながら労働組合をめぐる状況は大きく違います。日本全体としての組合組織率は2割を割り込み、声をあげること、正当に主張することをためらう雰囲気が社会全体を覆っています。みなさんの職場、みなさん個人の中にもそんなためらいが漂っているのではないのでしょうか。だからといって、要求し、声をあげ続けなければ、60年の月日をかけて築き上げてきた私たち働くものの権利、出版文化を支える平和で自由な社会を守り続けることは難しいでしょう。

希望をもって新しく労働組合に入る仲間がいます。不当な攻撃に立ち上がろうとする仲間がいます。私たちは一人ではありません。ほんの少しの勇気をもって声をあげましょう。その声を集めて、より大きな声にしていきましょう。

本日の定期大会では、25名の代議員から発言がありました。

- 性的少数者の新たな制度獲得に関連して、「当事者の声をしっかりきくことが大事だ。組合の実績作りのためだけになってはならない」
 - 組合継承問題については、「持続可能な組合とするために」「原則論の押し付けでなく丁寧に後輩へ伝えていかななくてはならない」
 - 定年延長のとりくみについては、「議論の積み重ねを大事にしてきた」
 - フリーランスのセクハラ被害については、「版元の労働相談窓口フリーランスも相談できるようにしてはどうか」
 - ダブルワークせざるを得ない厳しい状況に対して、「最低賃金を1500円にしたい」
- これらは、代議員の発言の一部です。

本日の討論からは、今直面している厳しい労働環境の問題、労使関係の問題、セクハラ・パワハラの問題についての問題提起がありました。組合の継承問題についてもまったなしの状況であることが、多くの単組から指摘されました。いずれも、課題は大きく簡単に解決できるものではありませんが、本日の討議の中で問題を共有し、ともに前に進むことを確認しあいました。

労働組合の基本は働くものどうしの助け合いです。今、こうして私たちは出版労連に集い、知恵を出し合い、助け合いの仕組みを作り上げています。一方で、社会そのものが分断の方向に進もうとしています。私たち労働組合はもっと強くならなければならない。もっと多くの人々とつながらなければならない。そして言論・出版・表現の自由を守るために、ともに手を携え前に進みましょう。

以上、宣言します。

2018年7月13日

日本出版労働組合連合会 第131回定期大会